

視点

スポーツを通じての コミュニティづくり

財団法人日本サッカー協会理事 高橋 明
財団法人埼玉県サッカー協会事務局長



(財)埼玉県サッカー協会（以下、SFA）は、(財)日本サッカー協会の傘下であり、浦和レッズ、大宮アルディージャというJリーグクラブからアマチュアの社会人や高校生、中学生、そして小学生のチーム、さらには女子、シニア、フットサルまでを統括する唯一の組織です。急成長を遂げる日本サッカーの中にあり、古くからの“サッカーどころ”として、選手や指導者の輩出、埼玉スタジアムでの国際試合開催など、様々な形で貢献しているところです。

現在、日本サッカー協会は2015年までに日本代表が世界のベスト10に入ることを目的にしています。また2050年までにもう一度ワールドカップを開催し、そこで優勝するという夢を持っています。これらの実現のため、SFAは2006年にビジョンと8つのミッションを作成しました。ビジョンを「(財)埼玉県サッカー協会は、活気と秩序と潤いのある社会づくり・自立できる人間づくりに貢献し、地域コミュニティの再生を目指しています」とし、サッカーに必要な技術や体力の向上以前に、「人づくり」を目的としました。そして、この「人づくり」の場を、ミッション1に「学校を核にした地域活動、地域スポーツ活動の活性化」と掲げているのです。

若年層においては、少子化が叫ばれながらもサッカー人口はまだ増えています。しかしながら、施設は有限であり、県内を見ても特に南部などの都市部ではグラウンドの予約に熾烈な競争が繰り広げられている状態です。そこで地域にある学校の施設が大きな役割を果たすのではないのでしょうか。日頃練習しているグラウンドで、週末に試合を行うの

です。午前中にサッカーならば、午後は野球。体育館ではバレーやバスケット、特別教室では絵画などを展示し、文化活動のギャラリーとする。地域の人たちが週末に学校へ訪れ、声援を送り、子どもたちの成長を見守るのです。試合でケガをしたら医務室で地域のドクターが診てくれる、また地域の人材による講座が開かれる……学校が地域コミュニティの核として位置づけられれば、もっと地域に活気や潤いが出てくるのではないのでしょうか。

その具体策として、SFAは小学生年代を対象にした「4種リーグ」を始めて、もう5年目となります。これまで子どもたちの公式戦は年数試合で、それも負ければ終わりのトーナメント戦。その試合は、その多くが地域から離れたところでの開催でした。この「4種リーグ」は、日頃練習しているグラウンドで試合をしてほしい、ぜひ地域の人たちに見てもらいたいと願って始めました。人は人の中で育つのです。子どもたちは、地域の大人たちに見守られながらホームゲームの試合には感謝し、相手チームのアウェイに行くときは、先方のコミュニティに感謝しながら試合をするのです。この感謝の気持ちをベースとした上で、技術や体力などが上乘せられて、子どもたちは「いい選手」になっていくと思うのです。

3月の東日本大震災においては、地域コミュニティ、それも人と人との繋がりが、生死を分けたとも聞いています。またその繋がりが復興への原動力となっているそうです。埼玉でもぜひ、スポーツや文化活動を通じて、学校を核とした地域コミュニティの再生を図っていただければと願っている次第です。